となみ野美術展 2014 入賞者一覧

●となみ野美術大賞（買上げ賞）

工芸部門
織田　定男（おだ・さだお）〈砺波市〉
作品名「記憶の情景」（きおくのじょうけい）

●北日本新聞社賞（部門賞）

日本画　部門
岡田　紫音（おかだ・しおん）〈南砺市福野〉
作品名「パンドラの詩」（ぱんどらのうた）

洋画　部門
吉井　覚（よしい・さとる）〈南砺市福野〉
作品名「刻―大地の叫び」（とき―だいちのさけび）

彫刻　部門
小西　徳泉（こにし・とくせん）〈南砺市井波〉
作品名「残暑」（ざんしょ）

工芸　部門
得地　秀生（とくち・ひでお）〈南砺市福光〉
作品名「太古の国から」（たいこのくにから）

書　部門
筱岡　麗子（しのおか・れいこ）〈小矢部市〉
作品名「饗」（もてなす）

写真　部門
片岸　勉（かたぎし・つとむ）〈南砺市福光〉
作品名「初春の響」（しょしゅんのひびき）

となみ野美術展2014（総評）　　神戸市立小磯記念美術館　島田 康寛 館長

となみ野美術展は全体的にレベルが高く、大変見応えのある展覧会でした。工芸、彫刻部門は作品の質が高いだけではなく、木彫や漆などの地元の伝統が感じられました。また、日本画部門では繊細な作品が、洋画部門は迫力ある作品が多く見受けられました。写真部門では、忠実に風景を捉える写真と画面に手を加えて作り上げる構成的な写真の両方が混在して、変化に富んでいます。そして、書部門では前衛的な作品が多く展示されていて驚かされました。

●となみ野美術大賞（買上げ賞）

となみ野美術大賞の作品（工芸部門　織田定男・作「記憶の情景」は、漆独特の光沢や色の綺麗さを十分に表現しています。丸い曲線が重なり、円に近い形は、漆作品としては前衛的な造形ではないでしょうか。また中心部が刳り抜かれ金箔が施されています。深い漆黒と微かに見える金色が調和してどこか温かみのある作品となっています。技術と表現と両方の面で現代の工芸作品に相応しく、今後の活躍を期待しています。

●北日本新聞社賞（部門賞）

▽日本画部門受賞作品（岡田紫音・作「パンドラの詩」）は、色を殆ど使わないモノクロームの色調ですが、それ故に大変強さが感じられます。直線と曲線を多用し、記号を用いて画面を構成しています。最近の新しい日本画にこのような傾向があり、作者の若く新しい感覚が見受けられます。力強さと装飾性が融合した見事な作品です。

▽洋画部門受賞作品（吉井覚・作「刻−大地の叫び」）は、微妙な色合いを駆使して、画面に浮かんでは漂うような表現に成功しています。まるで麻生三郎を連想させますが、作者の技量によるところが大きいです。洋画は日本画に比べると、現実に対する批評的な精神が含まれることが多い傾向にあります。現実という物が、今後どうなっていくのかと言う作者の疑問や不安が感じられる 1 枚です。

▽彫刻部門受賞作品（小西徳泉・作「残暑」）は、素朴なノミの跡を残しながら、量感を強く意識させられます。体格の良い男性と木の重量感がマッチして、存在感のある作品となっています。繊細な技術に頼らない作風に好感が持てます。

▽工芸部門受賞作品（得地秀生・作「太古の国から」）は、細かいノミ目と粗いノミ目が繊細に使い分けられていて、技術がよく生かされています。構成などはこれといって真新しいものではありませんが、清新な印象を受けました。審査後に作者の年齢をお聞きし、ベテランらしさを感じさせない若さが作品に表れています。

▽書部門受賞作品（篠岡麗子・作「饗」）は、文字のバランス、余白など画面構成が上手く纏まっている作品でした。擦れ、滲みなど墨の特徴を最大限に生かせばもっと良い作品になると思います。伝統的な書と前衛書を比べると、やはり前衛書の方が力強い印象を受けます。しかし、書というのは、造形性だけではなく文字が読め、尚かつ意味を持っています。そのことを考えると、この作品は両方を備えていました。

▽写真部門受賞作品（片岸勉・作「初春の響」）は、爽やかな冬の寒さだけではなく、雪の質感に温かみが感じられます。カメラ技術が発達した現代では、写真を撮ることが日常的に行われています。風景を撮影することは凡庸な物になりやすく、ある意味非常に難しいです。トリミング、カメラアングルなど風景に変化を付ける取り組み方は様々ですが、この作品は真正面から取り組んでいます。これは写真ならではの表現の可能性だと思いますが、その真正面さが返って良い印象を与えています。